以上のように、勝坂式終末期における県内北西部と南東部の、主に大木8ａ式と勝坂式の混交する様相を比較してきたが、１本隆帯、２本隆帯、３本隆帯描出、単位文連結要素、連結手法、単位数などに地域的な様相が窺われると共に、勝坂式の構成原理が地域的な変容を受けながらも顕在化されていることが観察された。

中野遺跡の１は口縁部が６単位構成であるが、これは大きくは３単位の倍数と捉えることができ、勝坂式の原理が作用していると考えられる。また、口縁部文様帯と勝坂式的な頚部文様帯を別構成とすることも、他に同様の事例があることから決して偶然の出来事ではなく、大木式的な要素及び構成に対してさえも、対称性を崩すという立場から勝坂式の主要な構成原理が働いた結果であると判断されるのである。

従って、中野遺跡の１は、７以外の他の土器群とほぼ同時期の加曽利ＥⅠ式成立直前期に位置付けられるもので、大木8ａ式の大きな進出期における勝坂式の構成原理の変容を物語るものであり、来るべき加曽利ＥⅠ式成立に向かっての準備が行われている土器として注目、評価される資料なのである。

２　晩期の住居跡と出土遺物について

中野遺跡からは、県内でも珍しい晩期初頭の住居跡が２軒検出された。この秩父地方においても晩期の住居跡検出例は非常に少なく、貴重な資料を追加したことになる。ここでは中野遺跡の住居跡の形態と、該期の遺跡が集中する大宮台地や他県の事例との比較の上、中野遺跡検出の住居跡及び出土土器のの位相を検討してみたいと思う。なお、参考資料を第35図、第36図に示した。住居跡の大きさは120分の1、土器は８分の１に統一してある。

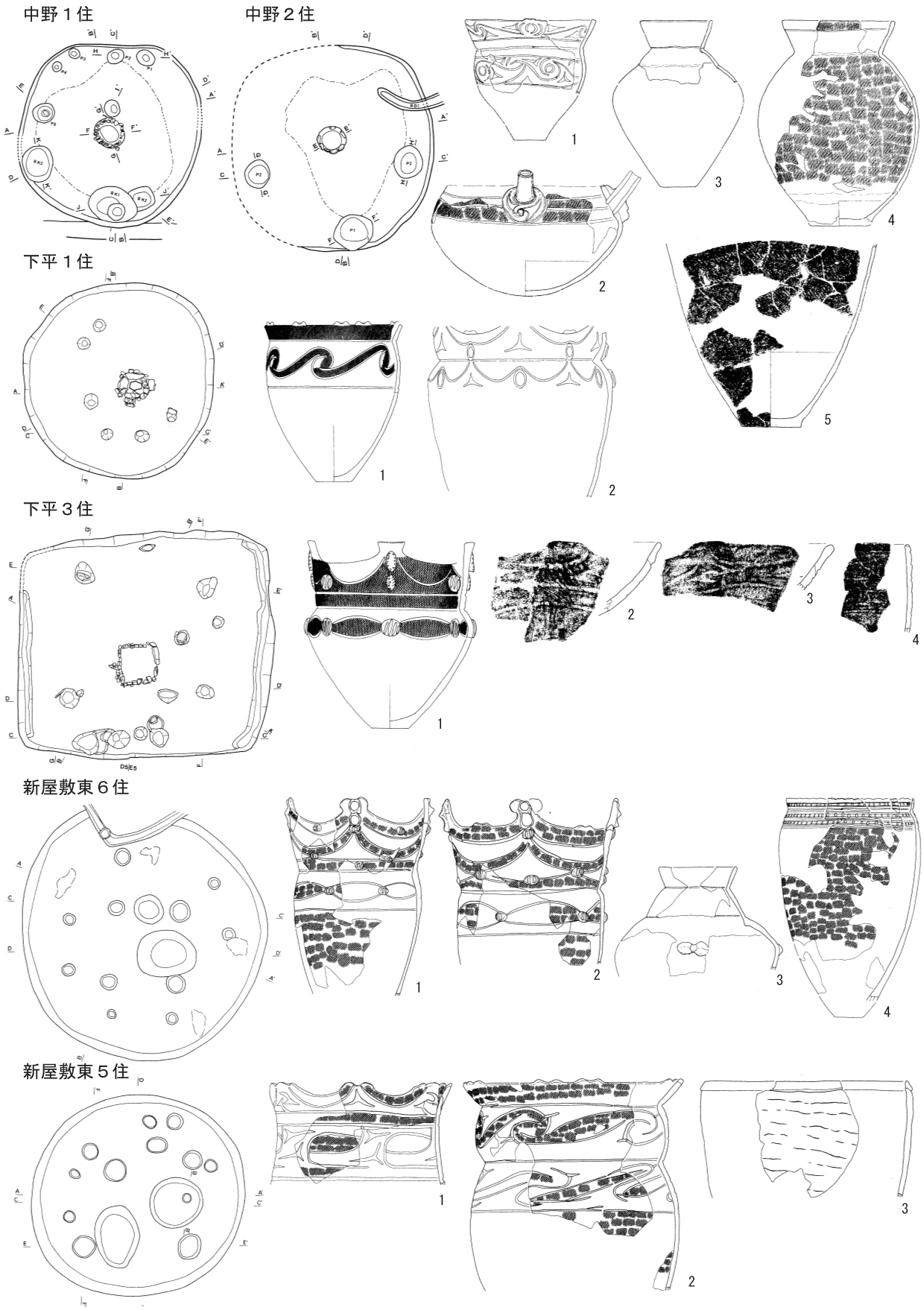
まず、中野遺跡の晩期初頭住居跡の特徴は、径４～５ｍ前後の円形に近い隅丸方形か楕円形を呈し、円礫の石囲炉で、明瞭な壁溝や柱穴を持たない点にある。柱穴は大きな土壙状のものや、小さく浅いピットが想定されるが明瞭ではない。出土土器から晩期初頭の安行Ⅲａ式終末期に比定されるの時期で、円形を基調とした住居形態であることが最大の特徴として捉えられよう。

秩父地方で晩期の住居跡は、合角ダム水没地域関連の調査による下平遺跡（橋本1995）で検出されている。下平遺跡第1号住（第35図）は中野遺跡第2号住居跡とほぼ同様な規模の、径4ｍ強の楕円形の住居跡で、板状角礫を楕円形に配列した石囲炉を持つものである。やはり、柱穴は明瞭ではない。時期は安行Ⅲｂ式～Ⅲｃ式にかけての遺物が出土しており、中野遺跡より若干新しい時期の所産である。

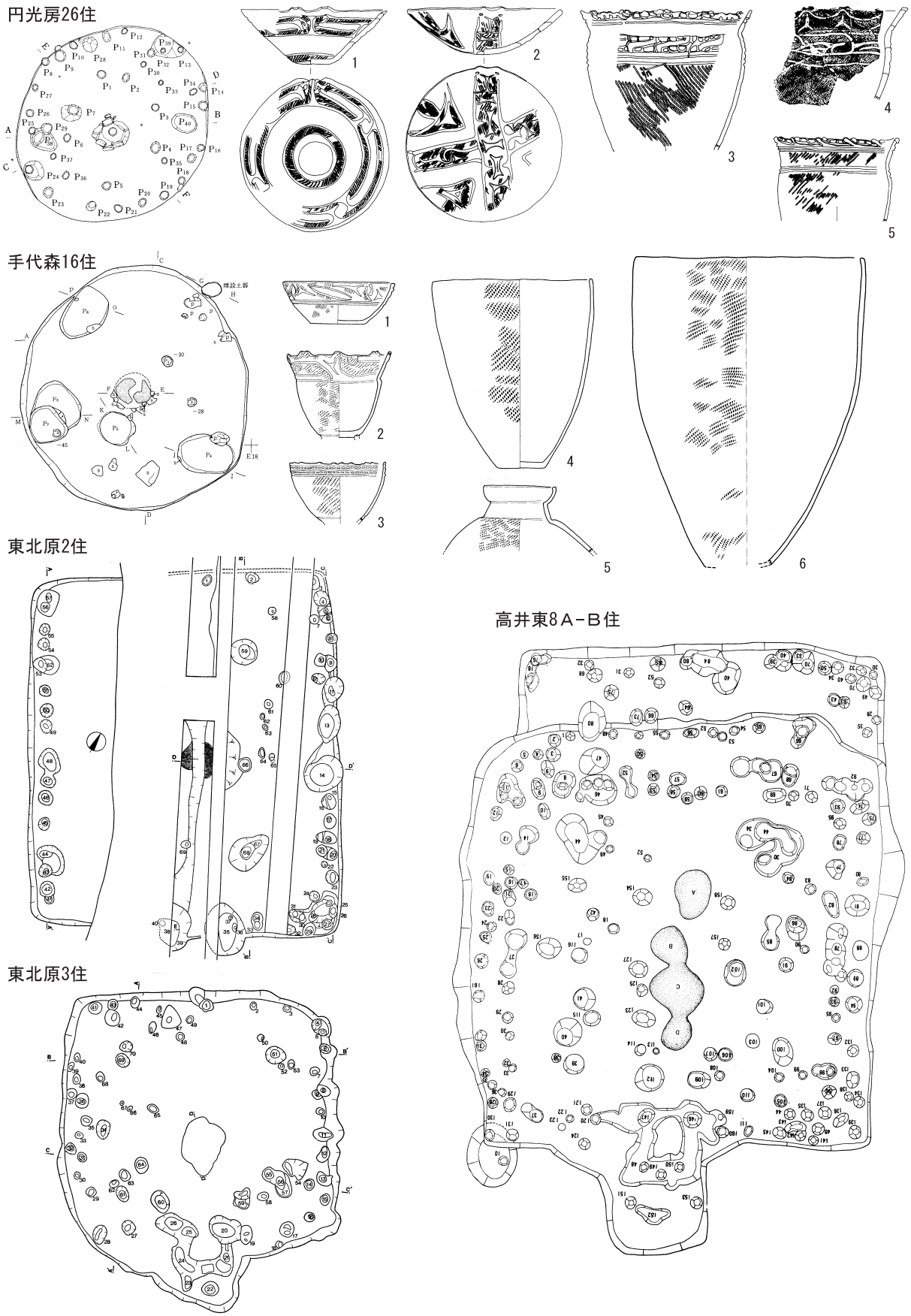
また、第３号住居跡は長径5.5ｍを測るほぼ方形を呈し、壁溝を持ち、４本柱を主柱とする構造である。炉は角礫を方形に並べた石囲炉である。安行Ⅲｂ式期の所産と思われる。出土土器は、後期から続く安行系の波状口縁精製深鉢土器１が出土している。方形で４本主柱、入り口部の対ピットと思われるピットも確認されることから、大宮台地の晩期安行式期の住居跡と同系の住居形態と推定される。

これらの少ない例からではあるが、秩父地方では、円形の住居跡と、安行系の方形の住居跡がほぼ同時期に存在し、安行Ⅲｃ式期にも円形の住居跡が存在していることから、それぞれの住居形態には系統差が現れていることが想定される。

秩父地方から離れ、県内でも北部地域の深谷市新屋敷東遺跡（新屋1992）でも、晩期の住居跡が検出されている。新屋敷東遺跡第６号住居跡（第35図）は径5.5ｍ前後の楕円形を呈し、浅い柱穴が円形状に並ぶ。その内４本を主柱と認識することもできる。炉は楕円形の地床炉である。また、第５号住居跡も径4.5ｍ前後の円形を呈し、柱穴が円形に並ぶ。その内4本を、第６号住居跡と同様に主柱と認識することもできる。第６号住居跡からは、安行系の波状口縁深鉢土器（1、2）が、大洞ＢＣ式系の土器（4）



第35図　晩期の住居形態（1）



第36図　晩期の住居形態（2）

と共に出土している。従って、住居跡は下平第３号住居跡と同様に、安行Ⅲｂ式期の所産と認定される。第5号住居跡からも、安行Ⅲｂ式の瓢形土器（2）や、東北瘤付土器系のモチーフを持つ深鉢土器（1）も出土している。

新屋敷東遺跡の住居跡が問題となるのは、出土土器が明らかな安行系の土器群で占められていることである。秩父地域の下平遺跡第３号住居跡は安行系の土器群で方形の住居跡であるが、新屋敷東遺跡の住居跡は安行系の土器群で円形の住居跡であるという点である。新屋敷遺跡の住居跡は４本柱の可能性があり、そうであるとすれば、安行系の方形住居構造と、円形の住居構造とが折衷しているのか、はたまた方形のプランを円形と誤認しているかのいずれかの可能性が考えられる。しかし、掘り込みが比較的深く、明瞭に検出される方形に廻る壁溝及び壁柱穴が検出されていないことから、円形もしくは楕円形プランを呈する蓋然性が高いものと判断される。土器の系統と住居の系統に整合性が見られないことになるが、それが実態であるのかは、現在では早急に解決する手立てはなく、今後の資料の増加を待って判断して行かざるを得ないと考えている。

秩父地域が隣接する中部山間地域での様相を見ると、晩期初頭の竪穴住居の検出例は決して多くはない。著名な例としては、長野県戸倉町円光房遺跡（原田1990）第26号住居跡（第36図）が挙げられる。第26号住居跡は長径4.4ｍ前後の楕円形を呈し、炉は川原石を６角形状に配した石囲炉で、全体的に掘り込みが殆ど確認されていないものである。多数のピットが円形状に存在するが、主柱穴は決め兼ねる。出土土器は大洞ＢＣ系の土器を伴う、在地の晩期前葉の土器群で、安行Ⅲｂ式平行となろう。全体的に、中野遺跡第1・2号住居跡、下平遺跡第１号住居跡、新屋敷遺跡第5・6号住居跡と規模や形態が類似する。

また、東北地方の晩期の住居跡は多数検出されているが、やはり晩期初頭の例は少ないと言えようか。晩期前葉の大洞ＢＣ式段階では良好な例が多く枚挙に遑が無いが、竪穴住居の形態は殆ど円形を基本にしたもので、主柱穴の不明瞭なものが多い。

代表的なものとして、中野遺跡第２号住居跡とほぼ同様な規模で、楕円形を呈し、柱穴とも土壙の重複とも判断しきれないピットが伴う岩手県柴波郡津南村手代森遺跡（佐々木1986）第16号住居跡（第36図）を挙げた。大洞ＢＣ式に比定される土器群が出土しており、１の浅鉢は口縁部に玉抱きに近い足の長い三叉文を、細長く斜位に施文する。この構成は、中野遺跡第２号住居跡出土の１の口縁部のモチーフを彷彿させる。

以上、大洞系の竪穴住居は円形を基本としていることが理解される。しかし、近年、晩期の平地式や掘立柱建物の存在が確認され、住居形態も一様ではないことが明らかにされている。そのような中で、竪穴住居の系列として、円形と方形があり、関東地方の方形は安行系の住居形態であることは明らかであろう。

第36図下段には、大宮台地における代表的な晩期の竪穴住居を示した。大宮台地においても晩期初頭の良好な住居跡例は少なく、前葉からは良好な住居跡が多くなる。

東北原遺跡（山形1985）第2号住居跡は中央部に撹乱を受けるが、長径7.4ｍの方形を呈し、入り口部の対ピットと壁柱穴が廻るものである。４本柱を主柱とするものと思われる。著名な動物型土製品（亀型土製品）が出土した住居跡で、安行Ⅲａ式～Ⅲｂ式にかけての所産と思われる。同じく第３号住居跡も方形で入り口施設を持ち、４本主柱の構造であるが、長径６ｍ弱の比較的小さな住居跡である。

また、高井東遺跡（田部井他1974）第8Ａ・Ｂ号住居跡は晩期の大型住居跡である。２軒が重複し、さらに8Ａ住居跡は２～３回の建て替えが行われている。第8Ａ号住居跡は長径9.2ｍ、短径8.9ｍを測り、安行Ⅲａ式土器が主体的に出土している。晩期安行式期の住居跡は、重複もしくは建て替えが行われている場合が殆どで、継続性が看取される。特に、大

型になる住居跡では顕著と言えよう。

このような円形と方形の住居形態の相違は、何に起因しているのであろうか。安行系の方形の住居跡は入り口施設を持ち、４本主柱で、壁柱穴を廻らせる構造で、後期安行Ⅰ式以降晩期中葉の安行Ⅲｃ式まで継続されている。また、円形の竪穴住居形態も、地域を変えて安行Ⅲｃ式まで継承されている。両者に系統差があることは明らかである。

ここであえて両者の相違を指摘すると、住居の上屋構造の相違を挙げることができよう。安行系の方形住居跡は４本主柱が太くしっかりしているものが多く、壁柱が廻ることから、屋根を葺き下ろさない壁立ち構造の家が想定される。切妻になるか入母屋になるかは判断しきれないが、壁立ちの方形住居は平地式もしくは掘立柱式（高床式）とも共通する要素を持つ。

一方、円形で主柱穴の不揃いな住居は、入母屋の葺き下ろしの構造が想定される。それは、東北地方を中心とする寒い地域で、雪国の住居形態を想定させられる。季節による住み分け形態であるかは別としても、山間部や比較的寒い地域での住居形態なのではなかろうか。

埼玉県の秩父地方や県北地方で、円形と方形の両者が混交する様相は、先にも述べたが、環境による形態の選択差ではなく、土器及び住居の系統差が何らかの形で現れているものと解釈される。早急に結論の出せる問題ではないが、情報の系統差という点から、今後検討を続けて行きたいと考えている。

さらに、注意しておきたいのは、今回の調査事例でも明らかであったが、柱穴とも土壙とも判断が難しいピットが住居内に存在することである。柱穴ならば問題はないが、他の土壙との重複であるとすれば、単なる土壙ではなく住居内墓壙の可能性がある点を指摘して置きたい。中野遺跡第１号住居跡のピット９からは漆製品が３点出土しており、蓋状の板状石で覆われていたことから、墓壙としての性格も否定しきれない。廃絶した住居内に墓壙を設ける行為は、およそ前期の後半段階からみられ、中期に於いては廃屋葬として特殊化するが、晩期にまで継承されるものであるとすれば、縄文時代の墓制にたな視点を提示するものとなろう。加曽利Ｂ式以降に墓域が確立化する動きの中で、屋内葬的な風習が継承されるのであれば、具体例を示せず、論は飛躍するが、同一墓壙内に多数の壷棺を追葬する弥生時代の再葬墓風習へのつながりの糸口が見出せるからである。今後の課題として置きたい。

最後に、遺物について若干検討しておきたい。中野遺跡からは波状口縁深鉢土器等の明瞭な安行式土器が出土しておらず、また、大洞系の土器も検出されていない。どちらかと言えば、中部、南東北地方的な土器群の様相の中に、安行式の影響が現れている在地的な土器群と認識されよう。

第２号住居跡出土の第35図1は口縁部と胴部に文様帯を持つ鉢状の土器であり、横連結する玉抱き三叉文は安行Ⅲｂ式や大洞ＢＣ式段階の三叉文に近い感じを受ける。まだ、明瞭に玉を抱いていることから安行Ⅲａ式段階に比定されるものと思われるが、その終末か、もしくはⅢｂ式初頭段階にまでずれ込む可能性もある。２の瓢形土器は、新屋敷東遺跡第６号住居跡出土第35図３や東北原遺跡出土の安行Ⅲｂ式段階の例と酷似し、注口土器の可能性がある。

また、中野遺跡第２号住居跡２の注口土器は、胴部文様が平行沈線に縄文を施文する単純な構成であり、安行Ⅲａ式に見出し難い要素である。覆土出土の破片の中にも平行沈線と縄文のみの破片が特徴的に含まれており、中野遺跡における一つの特徴と捉えることができよう。この平行沈線を多用する土器群は、花園町橋屋遺跡（高村1994）でも、共伴関係は明確にできないが、大洞ＢＣ式系土器と共に出土している。この平行沈線を多用する要素は、中部高地の晩期初頭の佐野式Ⅰａ、Ⅰｂ式にも見られる特徴であり、これらの影響と、安行Ⅲａ式とが折衷して、中野遺跡の土器群が成立したであろうことを指摘しておきたい。秩父地方の地域性を考慮すると、

佐野Ⅰ式の影響を考えざるを得ないであろう。

さらに、4の壷形土器や、5の深鉢土器は、その形態、羽状縄文の存在等から南東北の系統を考えるのが妥当であろう。

石器では、緑泥片岩製の石剣、石棒の未製品が多数検出されている。これらがそのまま機能していたかは判断されないが、製作途中品である可能性が高い。製作址としての可能性もあるが、今回の調査ではそこまで言及し得る資料は出土していない。

また、第2号住居跡の床面から翡翠の玉が出土している。酷似するものが蓮田市ささら遺跡（橋本1985）から出土している。大きさも、穿孔方法も類似するもので、関連性が窺われる。なお、石質の分析結果は巻末に示した通りである。

以上、今回の中野遺跡発掘調査は面積が狭かったものの、得られた成果は非常に貴重であったことが総括される。

＜参考文献＞

新屋雅明1992「新屋敷東・本郷前東」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第111集

小澤　守1991「秩父・上長瀞古墳群90」長瀞町上長瀞古墳群発掘調査会

小澤　守1999「秩父・辻遺跡97ー町内遺跡発掘調査報告書1ー」長瀞町教育委員会

小澤　守2000「秩父・袋遺跡96　秩父・辻遺跡97ー町内遺跡発掘調査報告書2ー」長瀞町教育委員会

小澤　守2001「秩父・堯田遺跡1996ー町内遺跡発掘調査報告書3ー」長瀞町教育委員会

小澤　守2003「秩父・六道遺跡1996ー町内遺跡発掘調査報告書4ー」長瀞町教育委員会

小澤　守2004「秩父・大滝遺跡2000ー町内遺跡発掘調査報告書5ー」長瀞町教育委員会

金子直行1987「北・八幡谷・相野谷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第66集

金子直行2000「堀東・城西Ⅱ」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第257集

金子直行2001「まま上遺跡」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第242集

佐々木清文1986「手代森遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第108集

鈴木敏昭1983「台耕地（Ⅰ）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第27集

高村敏則1994「橋屋遺跡」花園町教育委員会埋蔵文化財発掘調査報告書第1集

田部井　功1974「高井東遺跡調査報告書」埼玉県遺跡調査会報告第25集

中島　宏1982「中郷」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第13集

橋本　勉1985「ささら（Ⅱ）」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第47集

橋本康司1995「下平遺跡」『秩父合角ダム水没地域埋蔵文化財発掘調査報告書』小鹿野町教育委員会

原田政信1990「円光房遺跡」戸倉町教育委員会

村田章人1997「原／谷畑」埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第179集

山形洋一1985「東北原遺跡発掘調査報告ー第6次調査ー」大宮市文化財調査報告第19集